

「家族」の話 (異文化言い分EVEN)

著者	吉田 暢
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	206
ページ	58-58
発行年	2012-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003839

「家族」の話

吉田 暢

●共に生きる社会を
目指して

内閣府が行っている「外国人との共生社会」実現検討会議の中間的整理⁽¹⁾がさきごろ公表された。「グローバル化がいわれて久しい中で、我が国ではいまだに外国人との共生の実現を「検討」しているのか」とか「施策は本当に実現可能なのか」とか様々のご批判は想像に難くない。また「外国人」と自国社会との間で起る問題は、日本のみならず世界のあちらこちらで時として国論を二分するくらいに沸騰するようになってきた。しかし、であるからこそ、このプロセスが示す哲学にはひとつの意義があるように思う。

たとえば「外国人を受け入れる日本社会も変化する必要がある。(中略)社会の中に、外国人も含めた多様な構成員がいることによってむしろ社会が活性化されるといった視点が重要になっていく」というところ。それはこの問題を「外国人」をどう取り扱うか」としてではなく、「私たちの社会の在り方をどう考え行動するのか」という根源的な問いとして明確に捉えている点である。すなわち「外国人」を単に客体としてみるというのではなく、自らの社会の在り方を主体的に捉える中に「外国人」の存在をも位置づけていくこととする思考がみとれるのである。

●「ガイジン」と呼ばれる私たち

同じ日本人であるはずの私たちを「ガイジン」と呼ぶ集落が岩手のとある村にある。排外的にそう呼ぶのではなく、自分たちの集落の社会には存

在していなかっただけの視点や考え方を持ってその土地に現れた来訪者、という意味が込められていることは、人々との語らいの中から伝わってくる。ここでは「ガイジン」は、特別になにかを「教えてもらう」ことや「助けてもらう」ことではないし、人々の社会に「ガイジン」が持つ「価値」を外から無碍に持ち込み、当てはめようと思わない。つまり「ガイジン」は「助けて欲しい」と求められてもいないし、「助けてあげよう」とも思っていない。人々はその土地に暮らしたいから暮らし続け、「ガイジン」はそこに関わりたいと思えるから関わり続ける。そのことが成り立つのは「人がひとりですべてのこと」つまり社会の成り立ちが「ジブングト」から始まることとして人々がその社会を構成しているからであり、「ガイジン」もまたそう考えているからである。

小さくもこのような社会にあつて、「ガイジン」とも積極的に関わり合いながら、世代を超えて暮らし続けていくことは、当然のことながら人々の「家族」の形を考えていくことでもある。都会に出た子や孫は、帰ってくるのだろうか。これから生まれてくる子や孫は、この地に暮らし続けていくことを望むのだろうか。

●「益暮れ正月」と「田舎」

高速道路を埋めるマイカーの列。ごった返す駅のホームや空港のロビーはもはや風物詩ですらある。みな、どこへ行くのだろうか。「旅行」という人もいろいろ。そうでなければ帰省だろうか。なぜ、人は「田舎」に帰るのだろうか。「帰省」という言葉、「田舎に帰る」という言葉が目指す先には何が待っているのだろうか。

そこにはきつと「人」が待っている。「田舎」とは、たとえば「港町」や「よく通った近所の駄菓子屋」「小学校の低い鉄棒」というような具体的な場所のイメージに表される場所であると同時

に、帰る「人」と帰りを待っている「人」とが織りなす、実態と想像が折混ざった景色が現す場所のことであるように思う。

帰る人を待っている「人」は、誰よりも「家族」ではないだろうか。両親や祖父母、親戚や隣近所、果ては幼馴染みや同級生、恩師といった人々も「家族」同然であるかもしれない。帰る「人」は、帰る先に待っている「人」を想い浮かべる。「家族」の在り様に想いを馳せる。そして待っている「人」の向こう側に広がる「田舎」の景色を仰ぎみて、自分と「人」とが登場するシーンを想像しながら、混雑する交通に耐えて「田舎」を目指すのではないか。

「田舎」を思い描きながら帰省の途に就く人は、きつと幸せである。彼の脳裏に浮かぶ「家族」への想いが、景色やシーンを創出して彼を幸せにする。その時彼は、実は景色やシーンそのものではなく、自分の思い描く「家族」のイメージによって幸せになる。「田舎」に帰る人は、「家族」に帰るのである。

益暮れ正月に「田舎」を想う私たちが思い描く「家族」の像。一年に何度かでも自らの「家族」観について想いを巡らせることによって、私たちは「家族」を想うことの意義を改めて感じる。そのためならば、きつとあなたはテールランプの大型列も乗車率二〇〇%の新幹線も、きつと乗り越えられるに違いない。

このとりとめのない三つの散文から、ひよっとしたら思い起こされるかもしれないことについて、あなたと隣の人がなにかを語り始めることを想像することが楽しい。

《注》

(1) <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyousei/dai5/siryou2.pdf>